

しろげ

No. 5 1

協 誠 恕
心 心 心

校訓

令和7年度 研究紀要
秋田県立横手城南高等学校

「探究的な学びと未来」

校長 寺田 潤

令和6年度に全面実施となった現行の高等学校学習指導要領も、告示から7年近くが経過し、国においては現在、次期学習指導要領の改定に向けた議論が本格化している。

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程企画特別部会が令和7年9月に公表した論点整理では、「主体的・対話的で深い学び」の一層の充実をはじめ、多様性を包摂する柔軟な教育課程の在り方、情報活用能力の体系的育成、生成AI等への対応、学習評価の改善や教育課程全体の最適化などが、重要な柱として示された。これらは、生徒一人一人が自ら学び、考え、表現していく力を育むための方向性を示すものであり、学校現場における教育実践を見つめ直す上での重要な手がかりともなるものである。

本校では、こうした国の動向を踏まえ、令和7年度の授業実践重点事項を「生徒の主体性を高めるための探究的な学びの推進」と定め、授業改善に取り組んできた。具体的には、学習内容の定着を図るための「振り返りの時間の設定」と、生徒の思考を広げ、深めるための「ICT機器等の効果的な活用」を取組の柱と位置付けている。

各教科においては、それぞれの特性を踏まえ、教材の背景となる時代や思想、関連する社会的課題について、ICTを用いて事前に調査・考察することで、多角的な視点から問いを深める学習が行われてきた。また、目標設定から検証、改善に至るまでの学習プロセスを重視し、論理的思考力や計画力の育成を図っている。更に、調査・考察した内容を他者に伝え、相互に学び合う活動を取り入れることで、理解の深化と学習内容の定着を促す取組が進められてきた。これらはいずれも、各教科の特色を生かした探究的な学びの実践である。

こうした実践を重ねる中で、日々の授業や探究活動において、生徒が自ら問いを立て、考えを深め、言葉にして伝えようとする姿が、着実に見られるようになってきている。これらの取組は、探究的な学びを通して生徒の主体性を高めるとともに、自らの学びを振り返り、調整していく力、すなわち思考力・判断力・表現力の育成にもつながっている。

本紀要には、各教科におけるこれらの取組の成果とともに、授業改善に向けた課題や工夫が、具体的な実践事例としてまとめられている。本校の実践は、教育課程の柔軟化やICTの活用、探究活動の充実といった国の論点整理の方向性とも重なるものであり、学校現場における実践の一端として位置付けることができるだろう。

今後、社会の多様化や技術革新の進展、グローバル化の深化など、教育を取り巻く環境は一層大きく変化していくことが予想される。そのような時代において、教育の役割は、知識を身に付けさせることのみにとどまらない。生徒が自ら問いをもち、考え、表現しながら学び続ける姿勢こそが、未来を切り拓く力の基盤となるからである。

我々教師には、その成長を支える伴走者として、自らも学び続け、授業を磨き続けていくことが求められている。本紀要が、教員一人一人の継続的な学びと自己研鑽を支え、本校教育のさらなる充実につながることを期待したい。

目 次

【巻 頭 言】

「探究的な学びと未来」

校長 寺田 潤

(ページ)

【校内教科研修会】

地歴公民	「日本史探究（実践的指導力習得研修）」	渡部 栞	・・・	1
数 学	「数学Ⅱ」	鈴木 亘	・・・	6
理 科	「生物」	佐藤 修耕	・・・	10
英 語	「英語コミュニケーションⅡ」	萩原勢津子	・・・	14

【その他】

秋田県立横手城南高等学校の読書活動について

(令和7年度学校図書館活性化モデル校協議会 事例発表)

小山 隆 ・・・ 19

【編集後記】

研 修 部

地理歴史科学習指導案（日本史探究）

横手城南高等学校 普通科 文型 3年B組日本史選択者（34名）
令和7年9月16日（火）第5校時 201教室 指導者 渡部栞

1 単元名 開国と幕末の動乱

2 単元の目標

- (1) 19世紀半ばの欧米列強によるアジア進出とアヘン戦争の影響、これに対し江戸幕府がとった対応と限界、およびその後の条約改正交渉の経緯を理解する。また、開国に伴う社会・経済の変動が人々に与えた影響、尊王攘夷運動や公武合体運動といった幕末の主要な政治運動の背景と推移、さらには幕府の衰退と雄藩の台頭・討幕派の形成による政治構造の変化を理解する。
- (2) 開国と幕末の動乱が、国際情勢、国内の政治・経済、人々の思想など複数の要因が複雑に絡み合って生じたことを考察する。また、当時の幕府や諸藩、朝廷、諸外国、そして多様な思想を持つ人々の立場や思惑を理解してその選択や行動の背景を多角的に判断する。
- (3) 開国と幕末の動乱が近代日本形成の出発点であることに主体的に関心を持ち、激動の時代を生きた人々の決断や思想、そして国家・社会のあり方を現代の視点から深く考察しようと努める。

3 単元の評価規準

知識・技能	19世紀半ばの国際情勢と開国要求に対し、幕府の対応、不平等条約の内容、開国後の社会経済混乱、尊王攘夷・公武合体運動、そして幕府の衰退と政治構造の変化を説明できる。
思考・判断・表現	当時の人々の多様な立場や思惑から幕末の動乱を多角的に考察し、史料の読解・分析を通じて歴史的事象間の因果関係を論理的に説明・表現できる。
主体的に学習に取り組む態度	開国と幕末の動乱期が近代日本形成の重要な転換点であったことに主体的に関心を持ち、激動の時代を生きた人々の困難な決断や思想に共感しながら、当時の外交・内政課題が現代社会に与える示唆を自ら問い、深く考察しようと努めている。

4 本時計画（6／7）

(1) 学習課題

「幕府 VS ペリー艦隊！それぞれの主張を考えて、なぜ開国に至ったのかを考察しよう。」

(2) 本時の目標

【知識・技能】

ペリー来航時の日本の国際情勢（アヘン戦争後の東アジア情勢を含む）や、開国を求めるアメリカ側と、鎖国維持・情報収集を図る日本側それぞれの交渉目的、戦略、および制約条件を把握する。

【思考・判断・表現】

提示された史料や情報を基に、自らの役割になりきって論理的に交渉を進め、多角的な視点から歴史的事象を考察する力を養う。

【学びに向かう力・人間性】

仮想の交渉体験を通じて、歴史上の出来事を自分ごととして捉え、主体的に学習に取り組む意欲を高める。

(3) 学習過程

過程	学習内容（活動）	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> これまでの学習内容を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時につながるように、アヘン戦争やアメリカの捕鯨、日本における幕府の権威の衰退などについて学習したことを思い出させる。 	
展開① 15分	学習課題：幕府 VS ペリー艦隊！それぞれの主張を考えて、なぜ開国に至ったのかを考察しよう。		
展開② 25分	<p>1 6人ないしは7人1班になり、「幕府班」と「ペリー艦隊班」「江戸の民衆班」「アメリカの民衆班」の計4班を作る。</p> <p>2 各班で学習課題について話し合い、まとめる。 (1) 幕府班とペリー艦隊班 Chromebook や教科書等を用いて各班内で交渉の作戦や戦略を考える。 考えたことを、紙にまとめて交渉の際のメモ代わりにする。 その際、以下の4つの視点を重視する。 ①自分たちの陣営の最も優先すべき目標は何か ②どのような要求を出すか？その際に相手が受け入れやすい譲歩案は何か？ ③交渉決裂の可能性を考え、代替案や最終手段はあるか？</p> <p>(2) 江戸・アメリカの民衆班 Chromebook や教科書を用いてそれぞれの立場から、開国の条件を考える。 その際、以下の視点を重視する。 ①開国した場合の望ましい民衆の生活とは？ ②相手国と交易した場合のメリット・デメリットは？</p> <p>3 ロールプレイングを通して、当時の日本の状況について考察する。 ・幕府班とペリー艦隊班が、交渉をする。 ・江戸・アメリカの民衆班は、交渉を聞き、開国の条件等についての疑問や民衆の意見を幕府班とペリー班に共有する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> あらかじめ班のメンバーと役割を教師が決めておく。 ロールプレイングを通して学んで欲しいことを丁寧に伝える。 議論に行き詰まっている班には、歴史的背景を補足したり、より具体的な視点を示唆したりする。 それぞれの立場の視点に立って考えやすいように、できるだけ豊富な資料や情報を用意する。 資料として、NotebookLM の要約やリンク先の論文などをクラスルームに共有する。 民衆班は、開国のメリットとデメリットを両方考え、開国賛成意見と開国反対意見のどちらも幕府班もしくはペリー艦隊班に伝え、交渉の材料にしてもらえるように指示する。 質問への回答に詰まったり交渉中に混乱したりした場合には、1分以内のインターバルを取ってもよいことを伝える。 5分経過ごとに、民衆班と交わる時間を設ける（2分間） 交渉の過程を、教師が黒板に書いていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 資料を正確に読み取り、当時の状況を的確に捉えている。【知・技】（発言、メモ） 交渉における作戦や自分たちの主張を論理的に整理・考察している。【思・判・表】（発言、メモ） 相手の主張や質問の内容を的確に捉え、状況に応じて自分たちの考えを相手に伝わるように説明しようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】（発表）
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> 開国交渉のロールプレイングを通して感じたことや新たに気づいたことを個人でまとめる。 その際、以下の2つの視点で振り返る。 ①自分が演じた役割の立場で、最も困難に感じたこと。 ②交渉をする際もしくは民衆の立場から質問や確認する際に最も重視し、こだわったこと。 	<ul style="list-style-type: none"> 今回のロールプレイングを通して感じたことや反省したこと、考えたことを、次時には歴史的に位置づけるということを予告する。 Chromebook に振り返りをまとめさせる。 	

【実践的指導力習得研修】研究授業（日本史探究）を実施して

地歴公民科 渡部 栞

（１）研究授業を実施した感想

今回、3年B組の日本史探究の授業において、研究授業を行った。ビデオ撮影をするということだったが、3年生ということもあり、落ち着いた様子で授業に取り組んでいた。今回は江戸時代の後期にペリーが日本に来航し、開国交渉を行ったという状況を、ロールプレイングで再現させた。27名を①ペリー艦隊班②江戸幕府班③アメリカの国民班④日本の国民班の4つにグループ分けをした。ロールプレイング形式を採用した目的は、役になりきることで、当時の人々の苦悩や希望を実感し、歴史的制約を肌で感じてもらうことである。また、そのような実感を通して、歴史上の出来事には必ず背景があり、その内容も複雑に絡み合っているという視点を持ち、多角的な考察ができるようになって欲しいというゴールを見据えていた。

なお、ロールプレイングの実施にあたっては、生徒が所有しているChromebookを用いて、NotebookLMというツールで当時の状況に関する情報を整理させた。教員が予め参考資料をいくつかピックアップし、ソースとして共有しておく必要はあるが、生徒は単にサイトを調べたりAIに質問したりするだけではなく、確実な資料の中から必要な情報をチャット形式で抜き出すということが可能であった。そのため、ロールプレイングがスタートして、実際に交渉が行われている最中でも、聴衆はそれぞれの立場でより説得力のある根拠をリアルタイムで探すことができるという利点もあった。

メインとなるペリー艦隊班と江戸幕府班の生徒はこれまで習ってきた知識と新たに資料から得た根拠を組み合わせ、相手の反論を想定しながら自分たちの主張を納得させようと話し合い、調べていた。また、日米両国の国民班も、当時の国民の立場から、開国に関して両国の政府が行っている事に対するリアルな反応を探っていた。どの班の生徒も、歴史的な制約（例えば日本は開国を拒みたいが、軍力ではアメリカに圧倒されてしまうことや、アメリカは日本に開国を迫りたいが、日本は既にオランダとの貿易を続けているため、欧米とのさらなる関わりを拒みやすいことなど）に苦しめられながらも、必死に交渉しようとしていた。

このように、ロールプレイングは生徒の感情を直接揺さぶることが可能である。感情と結び付いた記憶はより鮮明に残りやすいため、今後もこのような歴史のターニングポイントとなる場面や、新たな視点を得て欲しい場面で取り入れていきたいと思った。

なお、生徒の振り返りをGoogleFormで実施したが、そこで多くの生徒が「自分の国の状況だけでなく、相手の国の状況も理解していないと交渉を有利に進められないという点に難しさを感じた」といった趣旨のことを述べていた。この気づきはまさにゴールとしていた多角的な視点の必要性の実感を読み取ることができ、目標達成に近づいたと捉えることができる。

一方、反省点もある。ペリー艦隊班と江戸幕府班のどちらの交渉が有利に終わったかということについて、生徒に決めさせなかったことである。史実とは別に、自分たちの感覚で「勝敗」を決めた方が、今後のロールプレイング学習への意欲向上につながったのではないかと反省した。また、そのような感情的な面だけでなく、なぜ負けたのか（なぜ勝つことができたのか）を

考えることは、自分の考えや考察を振り返ることになり、今後にもつながる。もっと説得力のある根拠が必要だった、相手の状況をもっと理解しておけばよかった、他の国の情勢も巻き込むことができればもっと有利に交渉が進んだかもしれない…など、ロールプレイングの結果について考えることは、自分たちの取り組みへの反省としても機能する。そして、そこで得た反省を元に、情報収集力や思考力、批判的な思考力、論理性などをさらに伸ばしていくことも期待できる。それらの力が着実に付く頃には、得た知識は当たり前のように身に付いているのではないだろうか。

研修の中で自分の授業のビデオを見た後に、以上のようなことを考えた。自分では気がつくことのできなかった視点で様々な意見やアドバイスを下さった他校の地歴公民科の受講者、指導主事にはとても感謝している。

(2) 研究授業をビデオ鑑賞した指導主事・受講者からの意見等 (→以降は渡部による分析)

- ・生徒たちが素直に指示に従い、必死になって自分の知識をフル活用し、相手を説得させようとしている。非常に濃い内容のディベートになっていた。
→ロールプレイングの経験が少ない割には頑張ってくれたと思う。自分の得た知識を根拠にして説得力のある考察や主張をさせるということは、普段の考査やレポート課題などで慣れさせていた。その成果も大きかったのではないかと思う。
- ・ペリー艦隊班と江戸幕府班のどちらが有利に交渉を進められたか、決着をつけさせるべき。また、本当の国同士の交渉のように、タイムリミットを明確に示すと、より盛り上がったのではないか。
→一番の反省点である。授業実践時には、決着をつけることが目的ではないし、勝敗が決まらなかった事こそが結論であると考えていたが、勝因・敗因を考えさせることで、より深い振り返りにつながったのではないかと反省した。また、タイムリミットを明確にすることについても、ロールプレイングの肝でもある没入感を高めるためにも有効である。
- ・今回のような大がかりなロールプレイングは、歴史の転換点などで、今後もどんどん実践していくべきである。
→ロールプレイングは生徒の感情を揺さぶることができるため、強い記憶に残る。だからこそ、重要なポイントで実践していきたい。また、その時に考えた内容はもちろん、考え方やものの見方も忘れないように指導していきたい。
- ・大がかりなものだけでなく、隣の人と短時間でロールプレイングをする機会もあっても良い。
→単に小テストなどで知識をアウトプットさせるよりも、論理的な説明のために活用させた方が確実に身に付くと考えるから、その手法はとても有効である。
- ・国民班が苦戦しているように見えた。実際の反応はどうだったか。
→実際に、国民班は各国の中でも意見が割れていたことから、まとまった主張をすることが難しかったようだ。意見が割れている中でも、自国の政府により有利な交渉を進めてもらうためにどの意見をどのように活用するかを考えて欲しかったが、説明不足であった。
- ・ロールプレイングは「協働的な学び」の実現がしやすい。
→特に今回のようなディベート形式であれば相手から突っ込みを受ける形で進んでいくので、自分にはなかった視点を得たり、知識の補い合いが自然と実現できたりすると思う。

(3) おわりに

今回は自分の研究授業に関する振り返りに終始したが、この研修においては、他の受講者の授業を撮影したビデオも見ることができた。地理の授業では、単調になりやすい気候分野の内容を、テーマ別に生活と結びつけて学習させることで、授業に変化をつけていた。これは、日本史においても単調になりやすい文化史などで応用できそうな手法であると考えた。また、公民の授業では、生徒自身が理解していないと完成させることが難しい「フローチャート」を作らせていた。これは新しいアウトプットの手法であり、日本史の各單元におけるまとめや振り返りなどでも活用できそうである。

このように今回の研修は、自分の授業を鑑賞して意見を頂くだけでなく、他者の授業を見て、自分の授業にどのように生かすかを考える非常に良い機会となった。他の受講者は、私が今回利用した NotebookLM の有用性に驚いていた。ICT 機器や新たなツールを授業に取り入れて、生徒の学びの一助にすることができたという点では、一定の成果があったと思う。

今後も、今回得た学びを忘れずに日々より良い授業を求めて努力していきたい。生徒をよく見て、自分の授業でどのように成長しているのかを見極め、必要な支援や指導ができる教師を目指していきたいと改めて考えた。

数学Ⅱ 学習指導案

実施日：令和7年10月27日（月）

場 所：201教室

対 象：3年B組（22名）

授業者：鈴木 亘

- 1 単 元 名 31 指数関数・対数関数（1）
（テキスト：数研出版「キートレーニング数学演習Ⅰ・Ⅱ・A・B・C」）
- 2 単 元 の 目 標 指数・対数関数の基本性質とグラフを深く理解し、それらを応用する力を養う。入試で頻出の方程式・不等式、最大・最小問題、桁数問題など、多様な問題パターンに対応できる思考力と計算力を育成する。
- 3 指導に当たって
 - （1）単 元 観
単元計画 31 指数関数・対数関数（1） （2時間） 《本時 1／4》
32 指数関数・対数関数（2） （2時間）
 - （2）生 徒 観 文型のクラスであり数学に苦手意識を持つ生徒が含まれるが、全体として明るく活発なクラスであり、グループワークにも積極的に参加をしている。ただし、男子がこの集団の中では2名しかおらず、活発な女子に押されて積極的な態度を取りづらい場面が見られる。
 - （3）指 導 観 基本的な事柄を徹底させた上で、入試問題を想定し、解法を組み立てる根拠を自分の言葉で表現できるようにさせたい。
- 4 本時の学習活動
 - （1）本時の目標 指数法則や体の変換公式など、指数関数・対数関数を取り扱う際の基本的な事項を復習したうえで、基本的な式変形、大小関係、桁数の問題などに取り組む。
 - （2）本時の指導 【問題演習】自分の言葉で表現することに力点を置き、他者の書いた解答を基に、に当たって他者との話し合いで自分の考えを深め、自分の言葉でそれを表現できることを目標とする。

(3) 指導過程 < ①知識・技能 ②思考・判断・表現 ③主体的に学習に取り組む態度 >

分	学習内容	指導上の留意点	評価の観点
導入 10	Get Ready 356 357 を基に指数法則や対数の計算規則について確認する。	・本時の目標、本時の流れを確認する。	①基本的な計算規則を修得できている。
展開 35	Training 358、359、360 ・板書されている解答について、その過程、根拠、表現方法などについて、他者と意見交換をすることで疑問点を整理し、それを解決していくことで理解を深める。 ・板書されている解答を過程や根拠を大切にしながら自分の言葉で解説をする。	・公式の適用に終始していないかを確認する。 ・建設的な話し合いになるように誘導する。 ・適切に表現できない場合は誘導をしたり、再度話し合いの時間を持たせたりする。 ・適切な記号や表現方法が用いられているのかを確認する。	②③解答の過程を他者と協議をすることで理解を深めることが出来る。 ②解答の根拠を自分の言葉で表現できる。
まとめ 5	○ノートにまとめる。 ・	・方程式や不等式への適用を示唆し、次時へのつながりをもたせる。	

(4) 本時の評価

評価項目	評価の観点 [判断基準]		努力を要する生徒への支援
	十分満足できる [A]	概ね満足できる [B]	
知識・技能	指数法則や対数の計算規則について正しく理解をしている。	必要な部分を教科書等で確認をすることが出来る。	教科書等を参照するように促す。
思考・判断・表現	自分の言葉で、解答の過程や根拠を表現することが出来る。	解答の過程を理解し、自分で再現できる。	話し合いの中で疑問を解決するように促す。
主体的に学習に取り組む態度	積極的に疑問点を見つけ、それを解決しようとする。	議論に参加しようとする姿勢がある。	話し合いを促すような声かけをする。

数学科授業研究会記録

日時：令和7年10月27日（月） 15：25～16：10

場所：202教室

指導助言者：佐藤 真弓

授業者：鈴木 亘

【授業者より】

あえて3年生の問題演習の授業を選択し、「協働作業」と「生徒のアウトプット（話すこと）」をコンセプトに授業を組み立てました。

板書はあえて休み時間には行わず、授業中に板書を書いている時間を、生徒にとっての「予習・確認の時間」として活用しています。また、板書担当と説明担当の生徒を分けることで、いつ指名されるか分からない適度な緊張感を持たせ、全員参加型の形式をとっています。

質問に対して答えられない場合は、深入りせずに次の生徒へ回すなど、生徒に過度な責任を感じさせないよう配慮しています。なお、解答はPDFで配布し、計算などの個別作業は各々の力で取り組む形にしています。

【参加者より】

- ・授業の構成が非常に明確で、流れに淀みがありませんでした。
- ・想定質問への準備：どのような質問が出るかをあらかじめ想定した深い予習がなされており、それがスムーズな運営の鍵となっていました。
- ・指名の工夫：質問に対してテンポよく次々と指名を行うことで、生徒が構えることなく自然に答えられる「答えやすさ」が生まれていました。
- ・数学的な思考を言語化し、共有する仕組みが機能していました。
- ・活発な相互作用：適度な緊張感を保ちながらも、生徒同士のやり取りや話し合いが非常に活発に行われていました。
- ・つぶやきの活用：生徒の何気ないつぶやきを教師が丁寧に拾い上げ、クラス全体の学びに還元する姿勢が印象的でした。
- ・ICT・ルールを活用：ルーレットによる指名は遊び心があり、数学が苦手な生徒が当たった際のフォローも的確で、教室全体で思考を共有する良い雰囲気がありました。
- ・文系の生徒が多いクラスでありながら、数学への苦手意識を感じさせない授業環境が構築されていました。
- ・役割分担と信頼感：板書担当と説明担当を分けるという独自の形態から、生徒と教師の間の強固な信頼関係が伺えました。
- ・全員参加の姿勢：板書中のわずかな予習時間であっても、全生徒が自分事として「数学」

に参加しており、普段の学習習慣の高さが示されていました。

- ・本校の生徒の特性に非常に合致した、質の高い実践でした。
- ・持続的な思考：授業中、常に生徒が「頭を動かしている」状態が続いていました。
- ・教科の本質：最終的な答えに到達することだけを目的とせず、答えに至るまでの過程や対話を重視しており、数学の本質が垣間見える授業でした。
- ・他教科への示唆：「数学でどのように話し合い、説明し合うか」という実践例は、他教科の教員にとっても非常に教育的価値が高く、参考になるものでした。

【指導助言】

「そろえる！！」というユニークな目標設定が目を引きました。「何をそろえるのか」と生徒がイメージを膨らませ、自然と興味を抱く工夫がなされています。数学に苦手意識を持ちやすい3年生の文系クラスにおいて、全員が自分事として課題に向き合っている姿は印象的でした。

適切な教材選定、自由な座席配置、そして生徒が躊躇なく教壇に立ち発表できる雰囲気。さらに、教員の説明時に議論を止めない生徒を自発的に注意し合う場面も見られ、日頃の学級経営と授業づくりの賜物であると感じました。特に「なぜ」という本質を突く発問が、深い学びを引き出しています。

一方で、数学の授業においては「問題を味わう」姿勢も重要です。教材の裾野が広いほど授業に深みが増すため、教師側の引き出しの多さが問われます。論理的な思考や多角的な視点を養う「協働的な学習」の良さを活かしつつも、最終的には「自力で解き切る力」をどう担保するかが鍵となります。生徒の考えを引き出すだけでなく、肝心の要点については、教師が責任を持って確認・定着させることが、学びの質を保証する上で不可欠です。

理科（生物） 学習指導案

日 時 : 令和7年10月27日(月)6校時
 対象生徒 : 2年D組28名(選択)
 場 所 : 生物実験室
 指 導 者 : 佐藤 修耕
 使用教科書 : 『高等学校 生物』(第一学習社)

1 単 元 名 2編 生命現象と物質 4章 代謝 2節 炭酸同化

2 単元と生徒

(1) 単元観 光合成は中学校でも学習し、生徒にとっても身近でよく耳にする言葉である。この単元では光合成のエネルギー変換などの詳細な光化学反応の仕組みを理解することを目標としている。本教材では光合成色素の抽出実験を行うことで、光合成をよりミクロな視点で学習する。

(2) 生徒観 2年生の理型クラス生物選択者の生徒28名(男子10名、女子18名)である。授業に意欲的に取り組んでいる生徒も多いが、全体的にはおとなしく、発問に対する反応は薄い。生徒が自発的に質問できる雰囲気、生徒同士で学びあえる雰囲気を作っていきたい。

(3) 指導観 光合成については、すでに生物基礎で学習済みである。「生物」での内容はより詳細な仕組みについての学習になるが、生物基礎での基礎的な知識に基づいてのものであるので、復習を通して丁寧に学習を進めていきたい。また生物の代謝は過程の複雑さや視認できない等の理由で苦手にする生徒が多い。実験を通して自分の目で変化を確認し、理解の助けになればと思う。

- 3 単元の目標
- (1) 炭酸同化についての基本的な概念や原理・原則について理解するとともに、それらの観察、実験などに関する技能を身に付けること。
 - (2) 炭酸同化について観察、実験などを通して探究し、炭酸同化の特徴を見いだして表現すること。
 - (3) 炭酸同化に主体的に関わり、科学的に探究しようとする態度と、生命を尊重する態度を養うこと。

4 単元の評価基準

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
炭酸同化についての基本的な概念や原理・原則について理解しているとともに、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本操作や記録などの基本的な技能を身に付けている。	炭酸同化について観察、実験などを通して探究し、炭酸同化の特徴を見いだして表現している。	炭酸同化に主体的に関わり、見通しをもったり振り返ったりするなど、科学的に探究しようとしている。

4 指導と評価の計画(全6時間、本時3/6)

時間	ねらい・学習活動	重点	記録	備考
1	・植物の葉緑体に含まれる光合成色素の種類と色について理解する。	知		・植物の葉緑体に含まれる光合成色素の種類と色について理解している。
2	・薄層クロマトグラフィーによって植物の光合成色素を分離する。	知	○	・薄層クロマトグラフィーによって植物の光合成色素を分離できる。

3	・分離された色素の色と Rf 値から色素の種類を推測する。	思	○	・分離された色素の色と Rf 値から色素の種類を推測できる。
4	・チラコイドで起こる反応の過程について理解する。	知		・チラコイドで起こる反応の過程について理解している。
5	・カルビン回路の過程について理解する。	知		・カルビン回路の過程について理解している。
6	・植物の光合成と細菌の光合成・化学合成との違いを理解する。	知		・植物の光合成と細菌の光合成・化学合成との違いを理解している。

5 本時の計画 (3 / 6時間)

(1) 本時のねらい

- ・クロマトグラフィーによる光合成色素の分離実験を通して、基本操作を習得するとともに、観察過程や結果を的確に記録、整理し、各色素の Rf 値について、科学的に探究する技能を身に付ける。
- ・様々な状態の葉の色を含有する光合成色素から説明できる。

(2) 展開

ア. 知識及び技能 イ. 思考力、判断力、表現力等 ウ. 学びに向かう力、人間性等

段階	学習活動	指導の留意点	評価の観点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習内容を確認する。 ・本時の目標を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の実験操作を確認させる。 ・本時の目標を提示し、確認させる。 	
(本時の目標) 葉に含まれる光合成色素を推定し違いを説明しよう。			
展開 40分	<ul style="list-style-type: none"> ・実験結果の整理。 4人×7班、 ・Rf 値と色素の色から葉に含まれる色素を推定する。 ・結果の発表 班ごとに発表 ・葉の色の説明。 	<ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板を用いて、他班にも見えるように掲示させる。 ・本時の目標をもう一度確認させてから考えさせる ・実験結果を根拠として説明させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実験結果をまとめ説明することができる。(イ)
(発問) 紅葉した葉の中では何が起きたのだろうか			
	<ul style="list-style-type: none"> ・葉の色の変化の説明。 ・アントシアニンの確認 (実験) ※今回の実験では分離できない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・机間指導を行い、話し合いが進まない班には声をかける。 	
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の内容の振り返りをする。 ・本時の学習の自己評価をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・植物の環境応答 (来年度の学習内容)との関連を示唆する。 	

(3) 目指す生徒の姿

観察・実験に意欲的に取り組み、実験結果から論理的に発言する姿勢を育成したい。

令和7年度 教育委員会指導主事等学校訪問 校内授業研究会（理科）

日時：令和7年10月27日（月） 15：25～16：10
場所：202教室
指導助言者：高校教育課 指導主事 後藤直地
授業者：佐藤修耕

1. 授業者より

光合成の単元における座学（理論学習）は終了しており、本時は実験を中心とした構成とした。前時に実施した色素分離実験では、公欠により生徒の3分の1が不在であった。本時の実験では、キサントフィル等の黄色い色素が明瞭に確認できた点は成果といえるが、班によってRf値に差が生じた原因については、今後の課題として残った。

ワークシートについては、生徒を誘導するように設問を用意したが、一部の班では意図した思考の深まりが見られなかった。

教材として用いた紅葉については、黄葉は良好な結果が得られたものの、赤葉は時期が早くクロロフィルが残存していたため、生徒に混乱を招いた可能性がある。この点については次時で補足したい。

2. 参観者より

- クロマトグラフィーの実験において、Rf値の計算がスムーズにできない生徒が散見されたが、これは本実験特有の難しさによるものか。

(回答) クラス間での習熟度のブレ幅が大きく、計算スキルの定着に課題を感じている。

- 全体的に奥ゆかしく控えめな生徒が多い印象を受けた。もっと積極的な場面を作るために、座席を丸く配置するなどの工夫を検討してみてもどうか。
- このクラスの生徒はおとなしくて反応が薄く、自分も授業で苦勞している。本時のグループ分けはどのように行ったのか。

(回答) 公欠者が多く欠席率が高かったため、あえて気の合う者同士でグループを組ませた。その結果、生徒間に動きが出て活発に活動できていた。

- 視覚的に非常に見やすい授業だった。身近な風景写真を活用している点は、自らの授業でも参考にしたい。生徒は静かだが、実験の最後には歓声が上がっており、関心の高さが伺えた。

- 本時のねらいである「説明できる」「身に付ける」ことに対する達成感ほどの程度か

(回答) Rf値の算出については概ねできていた。事象の説明については個人差が大きく、達成感を得られたのは全体の4分の1程度だと認識している。

- ICTの活用について、教員側からの提示はなされていたが、せっかく生徒がChromebook

を所持しているので、生徒側からのアウトプット（結果の共有や比較など）に活用する場面があってもよかった。一方で、反応が薄い割には、事後の説明などはしっかりできていたと感じる。

- 非常に面白そうな内容で、生徒が一生懸命に動いていたのが印象的だった。個々の発問に対し、最後に「まとめ」の時間を設けて着地を図ると、より学びが深まるのではないか。

3. 指導助言

- 目標の提示と意識付け
導入時に本時の目標と流れを提示したが、生徒が「何のためにこの作業をしているのか」を常に自覚できるよう、提示の仕方をさらに工夫（板書への常設等）し、着地点を明確にすることが望ましい。
- 観点別学習状況の評価
ワークシート右側の自己評価欄や記述内容に基づき、明確な評価基準（ルーブリック）を策定して評価を行うべきである。単元全体を通して、3観点（知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度）をバランス良く育成する視点が重要である。
- 「主体的に学習に取り組む態度」の評価と育成
単に意欲を見るだけでなく、学習に向かう姿勢を評価対象とする。授業の節目で「これまでの学習を振り返り、次に何をすべきか」を生徒自身に考えさせる場面を作ることが有効である。
- 生徒の感性を大切にする授業づくり
実験終盤に上がった生徒の歓声は、発見の喜びの表れであり、非常に貴重な瞬間である。こうした反応を大切にしつつ、生徒の興味・関心をさらなる探究心へと繋げていく指導が期待される。

英語科「英語コミュニケーションⅡ」学習指導案

実施日時：令和7年10月27日（月）6校時

対 象：秋田県立横手城南高等学校2年AB組（27名）

授 業 者：萩原 勢津子

教 科 書：Heartening English Communication II（桐原書店）

1 単元名 Lesson 7 Nursing in a War Zone

2 単元の目標

白川優子さんが国境なき医師団の看護師になった経緯、紛争地帯での看護の実態や白川さんの考えを読み、その特徴を整理し、国際協力のボランティア活動について自分の考えを述べるができる。

3 単元と関連する CAN-DO 形式での学習到達目標

読み、聞いたことについて、自分の考えに理由を添えて簡単に説明することができる。【GRADE 4 話すこと（発表）】

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> 情報や考えを述べるために必要な語彙や表現等を理解している。 自分が携わってみたい国際協力のボランティア活動について、理由とともに伝える技能を身に付けている。 	<ul style="list-style-type: none"> 白川さんについての記事を読んで、要点や詳細を理解している。 国際協力のボランティア活動に関する情報を理解し、携わってみたい活動について理由とともに伝えている。 	<ul style="list-style-type: none"> 白川さんについての記事を読んで、要点や詳細を理解しようとしている。 国際協力のボランティア活動に関する情報を理解し、自分の考えを伝えようとしている。

5 単元観

本単元は、国境なき医師団に所属する白川優子さんが看護師になった経緯、紛争地帯での看護の実態や白石さんの考えについて読み、その情報を整理し、国際協力のボランティア活動について自分の考えを述べる内容となっている。扱われている言語材料は、さまざまな分詞構文、独立分詞構文、付帯状況を表す＜with＋名詞＋分詞＞であり、関連する領域別項目は「話すこと（発表）」とする。ペアやグループでの活動を通して、新たに得た情報を整理しながら、幅広い知識を身につけ、主体的に社会の形成に参画する態度を養う機会となる単元である。

6 生徒観

真面目で素直な生徒が多く、教科の課題にもしっかりと取り組み、授業にも集中して臨んでいる。しかし、英文を主体的に読み、そこから自分の考えや意見を論理的に話したり書いたりする発信力を高めていく必要がある。

7 指導観

既習の知識と辞書を活用して主体的に英文を読む姿勢を育成するため、読解から解釈の確認までを「個人→ペア→全体」の流れで行い、達成感を引き出す。また、表現活動への支援として、具体例を紹介して興味・関心を高めるとともに、原稿作成や発表の際に使用する表現を提示する。

8 単元の指導と評価の計画(総時数:10時間)

時間	主な言語活動等	知	思	態
1	Think-Pair-Share / Before You Read 白川さんの仕事を推測し、国境なき医師団についての情報を聞き取る。 Part 1 白川さんが国境なき医師団に入団するまでの経緯を読み取る。(リスニング/内容理解/音読)		○	○
2	Part 1 夢の実現に向けて白川さんのように努力できるか、考えを述べる。(精読/表現活動)	○		○
3	Part 2 紛争地帯での看護活動の困難さを読み取る。(リスニング/内容理解/音読)		○	○

4	Part 2 白川さんのように、自分で問題解決した経験を紹介する。(精読/表現活動)	○		○
5	Part 3 紛争地帯での看護活動の危険と無力さを感じる白川さんの心情を読み取る。(リスニング/内容理解/音読)		○	○
6	Part 3 白川さんの立場ならば看護師とジャーナリストのどちらを選ぶか、考えを述べる。(精読/表現活動)	○		○
7	Part 4 白川さんが報われたと感じた瞬間を読み取る。(リスニング/内容理解/音読)		○	○
8	Part 4 白川さんのように、誰かの笑顔に励まされた経験を紹介する。(精読/表現活動)	○		○
9	Comprehension/Grammar 本文全体を読み返し、各パートに相応しいタイトルを選ぶ。分詞構文、付帯状況の with の用法を確認する。(内容理解/文法理解)	○		
10	Communication Activity 国際協力のボランティア活動についての説明を聞き、自分が携わってみたいボランティア活動とその理由について発表する。(情報整理/原稿作成/発表)	○	○	○
評価方法：活動の観察/小テスト(各パートの1時間目に実施)/ワークシート/2学期期末考査				

9 本時の学習(本時5/10)

(1) 目標

- ①既習の表現や文法事項、辞書を活用して紛争地帯での看護活動の実態を読み取ることができる。
- ②ペアで読み取った情報を共有し、紛争地帯での看護と白川さんの心情について整理することができる。

(2) 本時の展開

展開	学習活動	教師の支援及び留意点
導入 5	○ T/F 問題で Part2 の内容について復習をする。(5)	・ F の場合、正しい内容を確認させる。
展開 ① 20	○ 本時の目標と流れについて確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">Organize the information about nursing in a war zone and Shirakawa's feeling.</div> ○ リスニングによる要点把握 (10) ○ 新出語句の確認 (5) ○ 記事を読み取り、情報を整理する。 【個人】(5)	・ 1 回目はクイズに解答し、2 回目は答えの根拠となる箇所にアンダーラインを引かせる。 ・ 文字と意味、発音をリンクさせながら確認させる。 ・ 時間を意識しながら、既習の知識と辞書を用いて読み取るように指示する。 ・ ワークシートのまとめ方に沿って、情報を整理できるように支援する。
展開 ② 15	○ 記事の情報を整理する。【ペア】(5) ○ ワークシートの答え合わせ【全体】(10)	・ 各自の読み取りをペアで共有し、解釈について話し合いながらワークシートを完成させる。 ・ 全体でワークシートの答え合わせを行い、解釈を確認させる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"><p>[評価] 白川さんの記事を読み、読み取った情報をペアで共有し、紛争地域での看護と白川さんの心情について整理している。(ワークシート/活動の観察) 【思考・判断・表現/主体的に学習に取り組む態度】</p></div>
まとめ 10	○ 音読練習 (5) ○ 小テスト【Google Forms】(5)	・ 音読を通して、単語の読みと本文の内容を確認させる。 ・ Part 3 の語彙・表現・内容について理解度を確認させる。 ・ 不正解については復習するように促す。

令和7年度 教育委員会指導主事等学校訪問 校内授業研究会（英語科）

日時：令和7年10月27日（月） 15:25～16:10

場所：2B教室

指導助言者：秋田県教育委員会 指導主事 伊藤 健吾

授業者：萩原 勢津子

1. 授業者より

まじめな生徒が多い。大分良くなってきてはいるが人任せにし、最初から正解を出したいという人たちなので、自分の答えを他の人とすりあわせるという経験をさせたいと思ってこのような活動にした。1年生のときはグループだったので、今年度はペアでの活動にし、自力で読ませて、それから全体で共有するという流れにした。

普段通りの授業で、生徒たちは流れがわかっているのでスムーズに取り組んでいる。2時間の最初は大意把握、そのあと構文、精読へと進む。英語でやり取りする場面が少なくなるので、せめてペアでの活動は英語で行いたいと思っている。音読がもう少しスムーズにできれば良かったが、音声データを活用しているので、フレーズリーディングが難しい。今後は音読も段階的に練習していきたいと思っている。

2. 参加者より

- ・クラスの残りの人たちを担当しているが、いかに飽きさせないかが目標なので私のクラスでは同じことはできない。3人グループで”How about you?”と聞き返しをするなど、グループワークが成り立っていた。音読のスラッシュリーディングについては、先生が読んではいいいのではないか。小テストでは、内容を問う質問以外の正答率が低かったので、内容に関する問いを多めしたほうがいいのではないか。
- ・生徒たちは、自力で考える時間をもっており、ペアワークでの解答の比較や日本語での質問などを通じて、主体的に知識を補っていた。長文読解において、まずは母語で内容や背景知識を十分に理解させることが、英文を深く理解するための最良のアプローチであると改めて実感した。ワークシートでは、本文のキーワードや重要フレーズを挙げてスモールステップでまとめられるようになっており、生徒は本文の概要を的確に捉えることができた。全体での共有の場面では、積極的にメモを取って、多角的な視点から理解を深めている様子が見られた。音読練習において、全員で読む際に教科書を顔の高さまで上げて持つよう指導した点や、自主練習で起立して読むスタイルを取り入れたのは良かった。クラス全体がついていけていないと感じた際に、特定の文章を重点的に練習させてもいいのではないかと考えた。生徒の定着度と自信をさらに高めることができると思う。グーグルフォームを活用した小テストは、様々な問題形式で理解度を把握していたことや、早く終わった生徒が待っている間に自分の回答を見直してすぐにフィードバックを得られることが良かった。
- ・英語で様々な内容を伝えるというが大変だと常々思っているが、わからないと投げているよ

うな生徒もいなくて、安定感のある授業だった。毎回小テストを実施しているのか。目標としている振り返りの時間については、いろいろなやり方があると思うが、ICTの授業への取り入れ方の一つとして今日のような使い方がわかってよかった。

(回答) 小テストは、前半のときに毎回やっている。精読のところ間違えたところ等を意識して確認できるようにやっている。

- ・生徒はよく聞き取れていると感じた。最初のTFの問題は、古典でも使えると思った。ICT、スライド等、準備がたいへんだったと思うが、毎回Chromebookを使っているのか。またどれくらい普段の授業で使っているか。

(回答) 普段から今日使っている程度の頻度で使っている。出版社で用意した小テストを使っている。時間を掛けずに、そのまま手を加えず使っている。モニターに映しているものの中で毎回使えるようなものはスライドで用意している。フラッシュカードも出版社のもの。オリジナルで作っているのはシェアするときに使う英語表現とか、英作文の時の表現くらい。

- ・言葉を扱う教科として参考になった。間違えるのを恐れる生徒達だが楽しみながらやっているのが伝わってきた。どこに合わせたらいいか悩むことがあるが、これくらいのことならできる生徒がいるのだと思って、今後私もがんばりたいと思った。
- ・このような難しい、スピーディーな授業についていけるのだというのを見られて担任としてうれしかった。教科担任としてそういうところまでもっていかなければならないと思った。公共でも振り返りテストを毎回やっているが、この授業では人任せにしないで取り組んでいて、なぜ間違えたのかを考えている姿が見られた。萩原先生の声かけで安心してやれている。小テストの内容は、ペーパーテストでは出題するのか。また、評価の対象になっているか。

(回答) クラスでやっていることが違うので出題しない。評価の対象にもしていない。

- ・生徒が一生懸命、手を動かしながら伝えようとしている姿を見られた。ユニバーサルデザインの視点からすると電子黒板の背景はどうなのかなと思う。業者のものを使うとしかたがないのかもしれないが、背景が緑で、文字白がいいのではないかと思う。
- ・復習がきちんと機能している。間違えるというのは良いことだと思う。リスニングのところは、私なら生徒にまず当てて聞いていたが、挙手で確認するやり方もあるのだと思った。ワークシートの穴埋めも内容を把握する上でもよくできている。生徒は授業に慣れていて、日本語も書き込んだりしている。グーグルフォームも、自作は間違いが多くなる可能性があるので教科書会社のものを使えるのはいい。同じ授業の中で何度も本文をみる時間があって良かった。

3. 指導助言

高校教育課 指導主事 伊藤 健吾

このような機会にお互いに気づいたことを言い合っていないと良い授業をつくれな。落ち着いたスタイルで、生徒がお互いリスペクトして成立している授業。単語の意味のような細かいところから丁寧にやっていて、従来の授業をほぼオールイングリッシュでやっている。英語を話すことに対する抵抗感がなくなっていくのではないかと思う。和訳的なものもあつたので、目標としては、英語でのコミュニケーションがどれくらいあるかだと思う。良質なインプ

ットを前提として、このスタイルでどうアウトプットを増やしていくか、3年間の見通しを英語科として議論して欲しい。一人が発言し、その他の生徒が聞いているという場面が多いので、一人一人の発話という意味ではもう少し多くてもいい。単語を発音できない生徒がいることなどから、きちんと教えなければならないと萩原先生が判断してやっているのだと思ったが、3年生になったらもっと話す場面を増やして欲しい。教科書に出てくる単語が一部難しいと思ったが、でもあの単語を使うのかと考えると、定着させるというよりは、もう少し生徒同士のやり取りを増やす方向で活動を考えてもいい。また、その場で即興的に英語を話す場面というのがあればと思う。土台を作った上で、どこかで英語を使っていくという方向に切り替えていくと、速読力にもつながっていくと思う。どこで切り替えるかを考えてもらえればと思う。一人でやれるたくましい生徒を育てるために、もっと個別に活動するような場面があればいい。城南生の良さはあるが、このあと自己主張が強い生徒達の中で闘わせるためには、もっと一人でやらせるという場面を設け、たくましく育てていくことを英語科として考えていってほしい。

秋田県立横手城南高等学校の読書活動について
(令和7年度学校図書館活性化モデル校協議会 事例発表)

令和8年2月2日
教諭 小山 隆

はじめに城南高校について簡単に説明します。

◆横手城南高校について

校訓は「恕心、誠心、協心」。三心の訓と呼んでいます。「恕心」は、人を思いやる心、人への思いやりを大切にする心、普遍的な愛。「誠心」は、まごころ、誠の心、誠意を尽くして人や物事にあたる心。「協心」は、力を合わせて、ともに頑張ろうとする心、お互いに心をかよわせて和する心。となっています。

平成20年4月、本校が共学校としてスタートする際に、人を思いやる心を大切にする人材育成を目指し制定されました。また、それまでの校訓だった「清く、明るく、美しく、まごころ」の三く一ろの訓は、城南生の心の源とすべく生徒指標として掲げています。本校の生徒は全体的に素直でまじめであり、生徒たちはこれらの訓のもとに、主体的に学校生活に取り組み、地域社会に貢献できる人材を目指して、活気と魅力にあふれた学校生活を送っています。

◆図書館について

令和2年度より読書推進モデル校に指定され学校司書が配置されました。それ以前は、主に放課後の学習スペースとして図書館を開放していましたが、火気の取り扱いや職員の勤務時間、図書の管理や貸し出し方法などについての課題があり、年度によってその都度異なる対応をしていました。

学校司書が常駐するようになり、これらの課題は解決され、スムーズな図書館運営ができるようになりました。また、学校図書館管理ソフトの「エリーゼ・エッグ」を導入したことにより、蔵書の管理やカウンター業務が飛躍的に向上しました。さらに、令和5年度からは、全校生徒と全職員に「図書カード」を配布したことにより、本の貸し出し

の手続きが簡単になり、貸出数の増加につながっています。

本校のウイークポイントとして、図書館の位置がわかりにくく、足を運びづらいということがあります。本校は山の斜面に校舎が建築されたため、玄関は1階ですが、教室棟は2階

～4階、体育館は2階にあります。そして、図書館は別棟になっており、中2階という少し動線が不便な場所にあります。図書館の下の階には文化部部室などがあり、生徒たちは地下1階と呼んでいるようですが、不便なのであまり利用されていません。

(校舎全体図の説明)

道路をみてもらうとわかりやすいと思いますが、写真画面の右下の標高が低くなっており、左側の体育館が右側より高くなっています。また画面の右奥も高くなっていて、セミナーハウスがあると標高が一番高い位置になります。そして、図書館は右下よりも一段低いところに建設されていて、教室棟とは



中2階という形につながっています。階段の途中から分岐していて、生徒が普段通る動線から離れたところにあるので、校舎の中からは場所が分かりにくくなっています。

この図書館の場所を覚えてもらうために、新入生に対して4月のガイダンスを図書館で行っています。しかし、1回来ただけではわかりにくいので、図書館に足を運びやすくなるように、授業でも図書館を利用できるようにしています。そのため、ホワイトボードやWi-Fiなどを図書館に整備し、教室での授業と変わらない環境を提供しています。



これは、図書館内の本の展示の様子です。学校司書の下村さんが工夫してレイアウトしてくれています。

これは、英語の授業の様子で、ALTの先生がプレゼンテーションを行っている場面です。プロジェクターとスピーカーを常設しているので、いつでも使うことができます。Wi-fiも整備されているので、生徒は各自のタブレットを持参して授業に参加しています。



次に本校での読書活動の取り組みをいくつか紹介します。

◆移動図書館について

図書館の場所がわかりづらいため、県立図書館の貸し出しセットを活用した「移動図書館」を設置しており、本校の読書活動の取り組みの中心となっています。始めた当初は県立図書館の貸し出しセットをテーブルの上に展示するだけでしたが、現在では各学年のフロア上に3か所と生徒昇降口から図書館につながる廊下の計4箇所にも本のレイアウトを工夫しながら設置しています。

各学年に設置する図書については、年度初めに図書委員にテーマを設定させて、学期に1回を目安に入れ替えをしています。とくに、2階の3年生のフロアは、全校生徒が通る場所にあるため、本校の図書館の蔵書も展示しており、こちらは月に1回程度学校司書の下村さんがレイアウトを工夫しながら入れ替えをしてくれています。また、今年から図書館前の廊下にも移動図書館を設置しており、今まで殺風景だった廊下が、明るく華やかな本の展示場のようになっています。

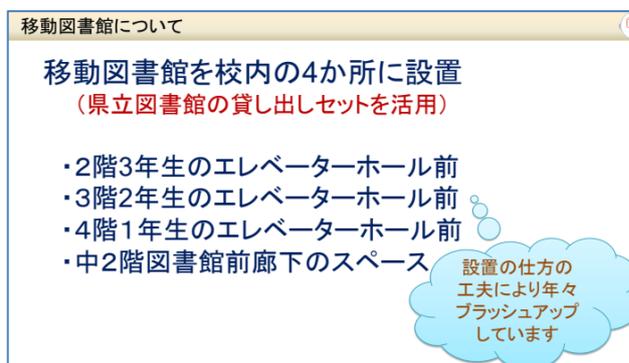
県立図書館の本は図書委員が展示と入れ替えを行っていますが、本校図書館の本については学校司書の裁量で入れ替えと展示を行っています。現時点で本校図書館の移動図書館は、「大学の研究」をテーマにした内容になっていますが、他にも「今年の本屋大賞」や「皆さんが生まれた頃に流行した本」、「心が潤いたいとき涙が出る本」など、生徒が選ぶテーマとは異なる視点での展示をしてくれまますので、生徒の興味・関心を引き出しているように感じています。またレイアウトが上手で自然に目に留まるので、足を止めてじっくりと本を選んでいる生徒もおります。

移動図書館の貸し出しについては、ファイルに必要事項を記入して借りる仕組みになっていますが、他の生徒に知られたくないという生徒もいるため、その点を配慮して氏名を書かずに番号を記入して借りることができるように工夫しています。

移動図書館のテーマの選び方や展示の仕方も、少しずつ良い方向へ進化してきているように感じています。

(移動図書館の様子を紹介)

これは3年生のフロアです。生徒がテーマを考えて、それに合った県立図書館の本を展示しています。





これは2年生のフロアです。



これは1年生のフロアです。



3年生の移動図書館を拡張して本校の図書を展示しています。テーマは学校司書の下夕村さんが生徒のテーマとかぶらないように設定してくれています。

右側は少し見えにくいかもしれませんが、移動図書館の貸し出し帳です。生徒は出席番号と本のバー

コードの番号を記入して借りるようになっており、誰が何の本を借りたのかわかりにくいようにしています。ちなみに職員は自分の名前を書いています。

これは図書館につながる廊下の移動図書館です。
学校司書の下夕村さんが定期的に入れ替え作業をしています。



◆蔵書検索プログラムの導入について

WEB サイトに「カーリル」という図書館検索サイトがあります。カーリルは全国 7,400 以上の図書館からリアルタイムの貸出状況を簡単に検索できるサービスです。このサイトの中に、「学校図書館支援プログラム」というのがあります。このプログラムは 2020 年にサービスの提供が開始され、本校では令和 6 年度からプログラムを導入して利用しています。主な特徴はスライドのようになっています。

蔵書検索プログラムの導入について

カーリル学校支援プログラムの特徴

1. スマホやタブレットを使って、図書館の蔵書を検索することができ、貸し出し予約もできる。
2. 県立図書館などの公立図書館の蔵書を同時に検索するように設定することができる。
3. 一度申し込めば、サービスを永続的に無償で利用することができる。

このプログラムは無償であることが最大の魅力となっています。また、手続きも簡単です。ISBN などの蔵書データを送る必要がありますが、申し込み受付から 3 営業日で「検索 URL」が発行されます。この URL を生徒に周知することで、すぐに利用することができます。本校では学校司書の下村さんが、明德館高校さんから情報を提供し

ていただきながら、導入を進めたという経緯があります。

詳細につきましてはカーリルの WEB サイトにわかりやすく掲載されていますので、ぜひご覧になっていただき、それぞれの学校で導入を検討されることをお勧めします。また、本校の WEB サイトに城南高校カーリルへのリンクがありますので、一度使ってみていただくと、こんな感じというのが実感できると思います。本校では横手市図書館と県立図書館の蔵書を同時に検索できるように設定しており、予約画面のフォームに入力した内容は、学校司書の下村さんに送信されるようになっています。



本校の生徒の活用状況ですが、どれくらいの生徒がこの検索プログラムを利用しているかというのを客観的に把握することができないので、アンケートを実施して確認する必要があると思っています。また、4月の図書館ガイダンスで使い方を一度だけ説明していますが、授業などの中で使う場面を設定していただくなど、使う回数を増やす工夫も必要であると感じています。

しかしながら、検索プログラムを導入しても、読書への興味・関心が薄いと使ってもらえないので、この根っこの部分とどのように連動させて相乗効果を高めていくかというのが、ポイントであり、今後の課題であると考えています。

蔵書検索プログラムの導入について

カーリル 学校図書館支援プログラム

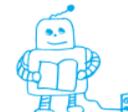
自由な検索サービスの展開を支援

■ サービスの概要 申し込み方法



自由なデータ形式による効率化

蔵書情報のデータ形式は限定せず、自由なデータ形式で受け付けています。図書館システムから抽出したそのままのデータや、日常的にExcelで管理している蔵書情報から蔵書検索サービスを簡単に立ち上げることができます。



オープンな書誌情報の自動補充

提供されるデータに加え、ISBNがある場合には、国立国会図書館やCiNii Books、openBDのリンク先書誌情報、書影などが自動的に補充されます。最低限のデータから品質の高い検索サービスを実現できます。



統合的な検索サービス

カーリルの業務用API「カーリル Untrad API」の技術基盤上の構築されているため、学校図書館同士はもちろん、国内のほとんどの公共図書館、大学図書館、電子書籍サービスと連携する検索サイトを構築できます。

(カーリル画面の紹介)
これはカーリルの WEB サイトです。

メニューをたどると「学校図書館支援プログラム」のページがあります。詳細はのちほどご覧になってください。

これは、本校のページで「8番出口」を検索したところでした。予約ボタンを押すと入力フォームが開きます。フォームの内容は学校司書の下村さんに届きます。あとで、いろいろと試してみてください。

蔵書検索プログラムの導入について

横手城南図書館 蔵書検索

8番出口

詳細検索

6件見つかりました。

タイトル	著者名	所蔵館
8番出口 小説	川村 光弘/著	978-4-910576-04-6
2館所蔵	秋田県立図書館 横手市立図書館	予約する
Cut 2025.9 【特集】 二宮和也 今という時代の『8番出口』	東京:ロッキング・オン 2025.08	1
キネマ旬報 2025-9月号 【特集】 『8番出口』とその先につ	東京:キネマ旬報社 2025.08	1
キネマ旬報 56号(1953.2)~ 1979号(2026.2月号)	キネマ旬報社	1
月刊ジュニアエラ 2025年8・9月合併号 【特集】 AI入門	東京:朝日新聞出版 2025.07	1

「8番出口」で検索してみました。
(予約する)をクリックすると入力フォームが開きます。

◆学校図書館の一般開放について

図書館の一般開放について調べてみると次のような目的がありました。

図書館一般開放について

一般開放の目的 (ネットでの検索結果)

子どもたちの読書活動を促進し、地域社会の教育力の向上に寄与することです。具体的には、以下のような目的があります。

- 子どもたちが自由に本を選んで読む経験を提供し、読書の楽しさを伝えること。
- 子どもたちの自発的、主体的な学習活動を支援し、情報の収集・選択・活用能力を育成すること。
- 学校図書館を介した子どもと大人の交流を促進し、地域社会の教育力の向上に寄与すること。
- 学校図書館を地域に開放し、地域住民が利用できる読書の場を提供すること。

本校では PTA と連携し、保護者も図書館を利用できることになっていましたが、実際に図書館を利用する保護者はいないのが現状でした。そこで、利用者を保護者を含めて一般市民に広げて図書館の活性化を図ることができないだろうか、ということを検討しました。令和6年度に一般開放について職員全体に提案して検討を進めたところ、生徒にとってのメリットが少ない、職員の負担が大きい、部外者を校内に入れることについて危機管理上の対策をどのようにするか、など否定的な意見が多くあげられました。これらの意見を踏まえて実施要項のたたき台を作成し、再度、職員会議での検討を得て11月から試験的に導入することになりました。実施要項は本校のWEBサイトに掲載していますので、後ほどご覧ください。実際には昨年度の一般市民利用者は一人もおりませんでした。

今年度から本実施となり、図書館だよりやWEBサイトなどで利用案内をしています。しかし、危機管理上の反対意見もあることから積極的な広報活動をしていないのが実情です。また、実際に一般市民の方が来校した場合は、まだ誰も経験したことがないので、対応に多少混乱が生じるのではないかと考えています。まずは、PTA活動などの行事の際に、保護者に図書館へ足を運んでもらいながら、身近な人から少しずつ理解を深めていただくことが必要かなと思っています。また、在校生に対して卒業後も図書館を利用できることを周知しておくことも、将来のニーズの掘り起こしにつながるのではないかと考えています。

(これは本校のホームページです。)

図書館一般開放について

図書館の利用について (一般市民の方へ)

本校の図書館は、一般市民の方も利用することができます。
利用可能な日時につきましては[図書館利用可能日一覧](#)をご覧ください。ただし学校の諸事情により急速閉館となる場合もありますので、ご了承ください。

1 本を借りるときには

- 利用可能日に本校事務室窓口にお越しください。その際、「運転免許証」、「マイナンバーカード」、「本校図書カード」のいずれかの提示をお願いします。
- 初めてご利用になるときに「本校図書カード」を発行いたしますので、[図書館利用申請書](#)の提出をお願いします。
- 事務室で渡された来校者名札をつけてから、図書館にお入りください。
- 借りたい本を図書館カウンターにお持ちください。本校職員が貸出し処理を行います。
- 貸出期間は2週間、貸出し冊数は2冊以内です。
- 次の2次元コードから、本校図書館の蔵書を検索することができます。



詳細は本校
WEBサイトをご
覧ください。

一般開放の要項や図書館蔵書検索へのリンクがあります。
後ほどご覧ください。

◆朝読書について

私は、開校してすぐの中高一貫校で、図書部主任として図書館の運営に関わったことがあります。その当時、朝読書を学校全体の特色として取り入れることができないかという提案があり、検討したことを思い出します。

すでに中学校では朝読書を実施しており、それを高校にも取り入れて学校全体の取り組みにできないか、ということでした。学年主任6名と図書主任による検討委員会を立ち上げて何回か協議しましたが、結論は「これまで通り中学校だけ実施する」ということになりました。

理由はいろいろありましたが、簡単に言うと読書に対するイメージが中学校と高校では違っていたということだと思います。高校ではどうしても教科の学習の一環として読書をとらえてしまいがちです。したがって、読む本やテーマを予め決めて選ばせる、簡単な感想文を書かせる、1週間に1冊読むことを目標にする、など様々な条件や課題を与えることを前提にして、朝読書を学習時間として活用しようとしています。これに対して、中学校ではまず読ませることが大切であるという主張で、課題や条件を与えると読書そのものが嫌いになってしまうという意見がほとんどで、「読む」という習慣作りに重点を置いていました。全国的にもこの考え方が当時の読書タイムの主流となっていました。結局、中学と高校の考え方の違いは平行線をたどり、朝読書は中学校だけの実施となりました。

本校においても、読書推進モデル校なので朝読書を導入してみてもどうかという管理職からの提案が2年前にありました。私はこのような過去の経験から、おそらく無理だろうと思いながら、各学年に検討をお願いしました。案の定、どの学年からも提案は却下されま

朝読書の導入について

◆ AI による概要

読書には、**脳の活性化（記憶力・集中力・認知機能向上）、ストレス軽減、語彙力・読解力・論理的思考力の向上、知識や教養の習得、想像力・共感力の育成、新しい視点やアイデアの獲得**など、心身の健康から知的・精神的な成長まで多岐にわたる効用があります。特に、**脳の繋がりを強化し、認知症リスクを低減する効果や、短時間の読書でストレスが大幅に減少する効果が研究で示されており、長生きにも繋がるとされています。**

読書の効用
メリットは多いが、実際に学校生活の中に時間を作るのは難しいのが現実

した。朝学習の時間は各教科で奪い合いになっているのに、朝読書が入る余地はないというものでした。しかし、朝読書というテーマについて職員みんなで考える時間を持てたということは意義があったように思います。そんなとき、3年生のクラス担任のS先生が、進路が決まった生徒に朝読書を実施したいということを申し出てくれました。そして、個人的に読書はとても大切だと思うということを力説してくれました。そこで、学年の了解を得てそのクラスだけ試験的に実施することになりました。後日、S先生に様子を聞くと、生徒たちは何もすることがないので素直に本を読んでいたとのことで、とてもいい時間を設定することができたとS先生はおっしゃっていました。

今年、その先生が1年部主任を務めることになったので、ダメもとで各学年にもう一度、

朝読書の導入の検討をお願いしました。その際、たたき台として2つの簡単なルールを示し、朝読書の方向性をシンプルな形でそろえてみました。そして、学習の一環としてではなく、あくまでもただの読書の時間として実施できないかという検討をお願いしました。

朝読書の導入について

朝読書のルール(たたき台)

- 1 本を読むだけ、課題や条件を与えない。
- 2 読む本は漫画や雑誌以外であれば何でもよい。
(活字が主になっているもの)

できるだけシンプルに捉えて欲張らないようにした

その結果、1年生は月曜と金曜の週2回、2年生は金曜日の週1回実施することになり、今年度4月からスタートしています。朝読書の様子を聞いてみると、生徒たちは時間になると本を取り出して素直に読書をしており、本を読むことに抵抗感はない様子であるというクラスがほとんどでした。あるクラスでは、教科の課題が間に合わない生徒がいて、目を離すとすぐに内職を始める生徒もいるとのことでしたが、生徒の状況に応じて柔軟に対応するようにお願いしています。

また、実施するにあたって生徒には次のように案内しています。(チャット画面)

朝読書の導入について

4月21日, 10:00

【図書部からお知らせ】(読書の良さについて)

人は、何かを考えたり、相手に気持ちを伝えたいときに、「言葉」を使います。「言葉」がないと、考えることができず、伝えることも難しくなります。読書に親しむことで、自然にたくさんの種類の「言葉」の意味やニュアンスを知ることができ、自分の「言葉」が少しずつ増えていきます。

今年から、**1年生は週2回、2年生は週1回の朝読書の時間を設定**していただきました。本と出会い、読書の時間を充実させることは、「言葉」を豊かにし、「考える力」や「伝える力」を磨くことにつながります。日本では江戸時代の昔から「読み書きそろばん」と言っ、て、学問の基礎もまずは「読むこと」とされてきました。今年度も一人一人が読書に親しみながら、それぞれの「言葉」を豊かにしてほしいと願っています。本校の図書館や移動図書館(今年度は5月以降に開設予定)も大いに活用してください。よろしくお願いします。

図書検索システムはこちら ⇒ <https://private.calil.jp/gk-2004811-pbdst/>
またはQRコードからご利用ください。

次年度以降、継続していくためには「朝読書の目的」や「読書の効果」についての先生方の共通理解を繰り返し確認していくことが必要ではないかと感じています。前年度踏襲で形だけになってしまうと、すぐに教科の学習の時間に戻ってしまうように思います。また、図書部としては、朝読書を図書館利用の増加につなげられるような工夫ができないか検討したいとも思っています。朝読書の効果は、すぐに生徒たちに表れるものではありませんが、生徒の将来にとって大切な力になることは間違いないと思っています。朝読書を実施してみ

のメリット・デメリットは何か、どんな変化があったか、などを毎年検証しながら情報交換をしていくことが大切だろうと感じています。

◆図書委員会について

図書委員会について

図書委員会の主な活動(令和7年度)

- ・移動図書館のテーマ選定と設置作業
- ・図書館だよりの作成と発行
- ・学校祭での展示
- ・ポップ交流への参加



生徒会の中の委員会活動として図書委員会があります。図書委員会の活動を活発化させることによって読書活動に貢献できないかということも課題として検討しています。すぐに思いつくのは、図書館のカウンター業務を図書委員にさせることです。昼休み、放課後の当番を割り当ててやってみましたが、昼休みは他の係り活動の様々な打ち合わせや

各教科の小テストの実施などで生徒たちはゆっくりと図書館に足を運ぶ時間がありません。放課後は部活動で忙しく、図書委員の割り当てさえも難しく、図書館に来る生徒は限られているのが現状でした。結局、労力の割には活動の成果が乏しく、常時の活動は難しいということがわかり、この活動は年度の途中でやめました。

また、委員会では図書館便りを定期的に発行しており、「読書」に関するインタビューや図書に関する話題を取り上げています。月1回の発行を目標にした年度もありましたが、指導に手間がかかるため、今は各学期に1～2回程度の発行回数として、内容を充実させるようにしています。また、以前は印刷して配布していましたが、内容にもよりますが生徒用チャットへの掲載を原則としています。

過去の反省点から、現在は必要に応じて図書委員を招集し、一定の期間限定で活動を行うようにしています。このほうが、生徒たちも自分の都合を調整することができ、アイデアを出しながら積極的に活動に取り組むことができます。今年度の図書委員会の主な活動は、移動図書館のテーマ選びと展示、「図書館だよりの作成と発行、図書館報の作成、学校祭での展示、ポップ交流への参加などを行いました。

(学校祭展示の様子の紹介)

これはしおりコンテストの様子です。毎年たくさんの応募があります。





これは図書館便り特別号です。学年ごとに図書委員が作成しました。

これは本のポップ紹介と本のクイズの様子です。

この他にも、大型絵本の展示や読み聞かせなど、図書委員が毎年アイデアを凝らしながら、展示を行っています。



◆図書活動の情報発信

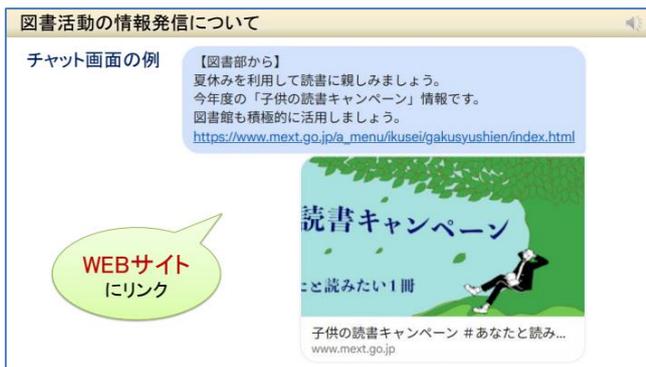
地域の図書に関するイベントや他校との交流事業、各種キャンペーンの案内など、生徒用チャットを活用して情報提供し、できるだけ参加するように生徒に呼び掛けています。また、図書購入希望調査や各種アンケートの実施、図書館だよりの発行もチャットを利用して行っています。チャットの利点は、リアルタイムに情報提供できるところにあります。

各種イベント情報に反応する生徒が毎年おり、とくに「ビブリオバトル」では昨年、今年と参加者が続き、今年は地区大会でチャンプ本を獲得して県大会に参加することもできたため、読書活動の啓蒙につながっていると感じています。「読み聞かせボランティア養成講座」への関心も高く、毎年、保育士希望者を中心に参加する生徒が多くいます。



(チャット画面の紹介)

アンケートや各種調査などのフォームにリンクすることができます。



WEBサイトに直接リンクできます。
 チラシなどのPDFファイルを紹介することができます。
 動画サイトを見ることもできます。
 生徒たちはそれぞれのタブレットやスマホからこれらの情報に随時アクセスして作業をすることができます。

◆今後に向けて（まとめ）

学校司書が常駐していることでカウンター業務や蔵書管理、貸出業務がスムーズに行われるようになりました。また、年2回の図書購入希望調査をもとに、ニーズに合わせた図書購入計画を立てており、学校図書館の利用者数は毎年増加傾向にあります。

これまでさまざまな取組を行ってきましたが、学校業務が多忙化する中で新規事業を増やすのは難しいのが現状です。新規事業も必要と思いますが、これまで行っていた事業を工夫・改善しながら、継続して行っていくことが、より大切ではないかと考えています。また効果や成果が薄いものは、思い切ってスクラップすることも必要であると思います。そして、これらの事業が「生徒の読書活動への関心」を高めることに、少しでも影響を与えることができれば嬉しいと思います。

今後については「生徒の読書活動の充実」を目標に、学校職員や地域の方々とも連携を図りながら、多くの方に利用される図書館づくりに少しでも貢献できることを目指したいと思っています。

これで発表を終わります。

長時間にわたり、ご清聴いただきありがとうございました。

今後の方向性について

今後に向けての目標

- ・生徒の読書への興味・関心を引き出す
- ・生徒の読書活動を充実させる

1. 新規事業も必要だが、現在行っていることを改善しながら継続していくことを、より大切にしたい。
2. やってみて効果や成果があまり得られなかった事案は、思い切ってスクラップすることも検討してみる。
3. 学校職員や地域の方々とも連携を図り、粘り強く情報共有をしていくことを心がけたい。

編集後記

研究紀要「ひろば」第51号を発行する運びとなりました。執筆にご協力いただいた先生方に、心より感謝申し上げます。

制度の変化により、教員一人ひとりの学びの在り方が再考される今、本誌の持つ役割はますます大きくなっています。新たな一歩となる第51号が、先生方の教育活動や研究に少しでも寄与できることを期待しております。今後とも、本校の教育研究の充実に向け、変わらぬご協力をお願い申し上げます。

秋田県立横手城南高等学校 研修部

令和7年度 ひろば No. 51

発行日 令和 8年 3月19日

**発行者 秋田県立横手城南高等学校
〒013-0016 横手市根岸町2-14**